「民間教育の力で日本再興の一歩を！」
～学ぶ重要性、学習意欲の向上を生徒・保護者へ伝え学力をさらに上げる！～

eisu group　COO最高執行責任者

伊藤 奈緒 氏

教育への意欲や向上心が低下する日本を再興したい

今年4月、『教育による日本再興論――教育は人と社会と国の未来を決する』を上梓した伊藤氏。早くも5回目の重版が決定したという。初となる著書に込めた想いを次のように話す。

「自給率の低いこの国の資源はまさに私たち国民であり、教育こそが未来への先行投資です。人的資源の価値を高めるため、より一層、国をあげて教育に力を入れることが日本再興のために必要不可欠です。

ところが、首都圏や関東・関西圏の小・中学受験市場を除いて、教育への意欲や向上心は低下の一途を辿っています。2000年以降のデータによると、過去最低の水準です。私は志を同じくする民間教育業界の皆さまと一緒に、この危機的な状況を打開したいとの想いで拙著を執筆しました」

人間関係の空洞化・希薄化 感情の劣化が著しく進行

なぜ、教育への意欲や向上心が低下しているのか。伊藤氏は社会学の見地から、そのポイントをパラフレーズして解説する。

「科学技術の驚異的な進化により、これまで手にしてきたものと引き換えに、私たちにとって〝本質的に大切な何か〟が失われています。超デジタル化に追い打ちをかけたパンデミックが相乗し、人間関係の空洞化・希薄化から孤立・孤独化へ〝ぼっち化〟が進み、多くの人間が精神のバランスを保てなくなりました。その結果、〝感情の劣化〟が著しく進行していると言われています。

遺伝子学的にも人間は孤立や孤独に耐えらず、集団を好む生きものです。人間の脳は〝ぼっち化〟に対して社会的苦痛を感じるように進化してきました。もともと人間は意志が非常に弱い生きもので、他者の存在があって意志を支えられています。周囲の目があって初めてモチベーションを維持できるのです」

そして、コロナ禍の3年間で学習塾の在在意義を大きく低下させたことが、いまの現状を招いたとの見識を伊藤氏は示した。

「経営リーダーは未曾有の事態に陥った時こそ、人間社会や組織、また自分にとって真に大切なものは何かを俯瞰し、深く考えるべきです。しかしながら、コロナ禍を振り返ると、休講やオンライン化、クラスを少人数に細分化してきました。それでは、民間教育業界が公教育とは対極のポジションで大切に提供し続けてきたもの、つまりピア・エフェクトの働くコアなサービス、つまり人間が人間をリアルにエンパワーし合う環境を提供できるはずがありません。

そもそも、公教育の脆弱化は、学習塾にとってむしろチャンスなはずです。この失敗を教訓にしても一度、学習塾の市場価値と労働生産性を上げていかなければなりません」

生徒・保護者を集団化して教場内コミュニティを強化

「各塾が校舎単位のユニットをベースに、人間の本質にアプローチしながら、人間でしかできないアナログとデジタルをハイブリッド化していくことが重要です。

そして、生徒・保護者をそれぞれ繋げて集団を再構築し、コミュニティを作るしか方法はありません。コミュニティの力で教育に対して主体的・意欲的な生徒・保護者を「**育てる**」方針に舵を切らなければならないと考えています。相当な労力がかかることは言うまでもありませんが、これを愚直に実践する塾とできない塾では、さらに淘汰が進んでいくと思います」

現在、eisu groupが注力する取り組みを伊藤氏は次のように明かした。

「まず、私が最も強くこだわる生徒に対するオペレーションは、教場内のコミュニティ化です。生徒・先生・スタッフの縦横斜めの関係性を構築し、とにかく来校させて校舎の再活性化を図ることに全力投球しています。

小中学部は授業がない日でも自習室を使ってもらい、質問に訪れる時間も設けています。また、オンライン授業を活用している大学受験部門でも、現時点では受講率より登校率を重視しています。

さらに、小中高校部でイベントを積極的に実施しています。集団化によって『友だちを連れてきて！』と声がけの大義名分が成り立ちます。体験受講生にも在籍生と同じ指導をして、校舎の一員としてコミュニティ参加している感覚を抱いてもらうように働きかけます。こうした取り組みは、早い段階で成果が出ると期待しています」

さらに、保護者に対する「教育」について、伊藤氏は次のように話す。

「高校生の場合、以前ならば生徒本人が入塾決定をしていましたが、昨今は保護者と生徒が一緒に来校するために入塾がなかなか決まりにくいと現場で実感しています。実際、三重大学社会学部の教授が示すデータによると、実は〝感情の劣化〟は子ども以上に大人の方が進んでいることがわかりました。

ここからはあくまでも私の仮説ですが、生徒以上に保護者の方が集団が好きな生き物であり、誰かの目がないとモチベーションを維持できない可能性が高いと推察しています。また、保護者は〝集団〟という価値観で育ってきた世代です。

そこで、生徒と同様に保護者を集団化して、同学年の子どもを持つ保護者同士が刺激し合うことでモチベーションを上げ、保護者の強いフォローアップがあってこそ、子どもの学力が上がることを実感できるように「**教育**」していかなければならないと考えています」

保護者を教育するために知見が豊富な本書を活用

保護者の教育に関する、シカゴ大学の最新研究結果が紹介された。

「教育への主体性が低い低学歴・低所得の保護者を集めて、子どもの教育に対する価値を理解させ、積極的に関わらせるプログラムを長期間にわたって実施しました。結論は、保護者教育によって、実際に子どもたちの学力が上がったのです。参加する動機付けとして報酬を与えましたが、使用用途を子どもが大学に進学する場合のみに限定したにもかかわらず、非常に大きな成果をもたらしました。子どもの学力向上に保護者が全集中するように促す重要性を示した、興味深い研究です」

保護者を「**教育**」するためのロジック・知見として、冒頭に紹介した本書を活用してほしいと強調した。

「拙書は、昨年まで三重大学大学院の博士課程で研究した学術論文の内容をリアルに抜粋しています。大学入学共通テストをテーマにした学術論文は、日本で初めてです」

伊藤氏は力強いメッセージで奮起を促し、講演を締めくくった。

「日本をリードする層を育てる、あるいは公教育についていけない子どもや馴染めない子どもを救済しているのも、私たち民間教育です。ここにお集まりの皆さまは民間教育業界の再興を担う〝一丁目一番地〟の方々です。皆さまが足元でできることから一歩ずつ踏み出し、それを全国に広めていけば、民間教育は必ず元気を取り戻せると信じています」

今年4月に伊藤奈緒氏が上梓した
『教育による日本再興論
教育は人と社会と国の未来を決する』